



「ゆきこんこん物語」

数十年前に出版された創作童話の復刻版を刊行する出版社が増えている。不朽の名作に、再び光が当たりつつある背景は何か。今年二十四年ぶりに復刊された、さねとつあきら作、井上洋介・絵「ゆきこんこん物語(理論社)」について、小規模作業所「夢屋」代表で文筆家の宮本誠一さん(阿蘇市)に、その意味を寄せてもらった。

24年ぶり復刊された創作童話「ゆきこんこん物語」に寄せて

— 宮本誠一

ある児童文学をめぐる鼎談で、『ゆきこんこん物語』の作者さねとつあきら氏は、少年時の「戦争体験」

部にある醜さと、それゆえもたらされる悲劇と美しさが根底に流れています。

が自らの創作の原点であると明かしています。子どもも子どもらしく精一杯、敵と戦ったという実体験は、えてして子どもを「社会」から切り離し、特別な存在に据えようとする昨今の風潮を危機としてとらえるのです。大人との共通基盤としての現実認識を放棄せず、子どもの心の壁に迫ることは、「二度と大人に騙されてはならぬ」という信念の結実へと繋がることも言えるでしょう。彼の文学の核は、そこにあります。

本著に収められた三編の創作民話も、人間の心の深

◇みやもと・せいいち
一九六一年荒尾市生まれ。小学校教師を経て、小規模作業所「夢屋」代表。「詩と真実」などに小説を書き、部落解放文学賞、泉民芸芸賞を受賞。

大人に洗脳される子どもの「白昼夢」

よくあるパターンなら、薄味の笑いとペーソスにけなげな人生訓めいた話が展開されるころですが、ここでは一味も二味も違った仕組みが重層的に仕掛けられます。

「ゆきこんこん」や「鬼」が、むしろ少女たちの無意識に潜んだ人間の本質をあばく役割を果たす点がそれです。特に『おにひめ』の一篇は象徴的で、ある意味、不気味です。

美貌の姫は大臣から求婚され都へと向かいます。途中、鬼の仕業の雪崩に遭い、しかも人間に化けたその鬼に助けられ、老夫婦の家へ辿り着きます。ところが、「やさしい人には気をつけろ」との母親の助言をひたすら信じればかりに、二人まで誤解して殺してしまふのです。動揺した彼女が逃げ込んだ小屋には例の鬼がいて、お前のような人間は鬼になって俺の嫁になるしかない、とつそぶぎ、彼女は果然とします。

これはまさに、大人社会に洗脳された果ての「白昼夢」です。やみくもに信じさせられることの裏に隠された△恐怖▽を「物語」という陰喩で、子どもたちの「生命力」と共振させ、伝えようとしています。

対等な生活者として子どもをみくびらず、がっぷりよつに組むことに賭してきた作家ならではの作品集の復刻の意味は、真に「こころにあるのではない」でしょう。

(文筆家)